

「ジョン・マー」に見る転覆のメカニズム

—— "flower of life" と先住民を巡って ——

大 島 由 起 子*

序

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-91) は、1888 年に遺言を書いた 3 月後に私家限定版として詩集『ジョン・マーと他の水夫たち』(*John Marr and Other Sailors with Some Sea-Pieces*) を 25 部出版した。同様に 25 部限定で、死の年、1891 年には『ティモレオン』(*Timoleon*) を出し、さらに遺稿として、別の詩集『雑草と野生植物』(*Weeds and Wildings*) に集められる詩篇、および、かの傑作「ビリー・バッド」("Billy Budd") を残す。このように、書き溜めたものが幾分あったとはいえ、最晩年は大変な創作量であった。晩年のメルヴィルは古代ギリシア・ローマに代表される神話や美術品収集をとおして美の世界に逃げ込んでいたような論じ方がされることも多いが、そのようなことはないであろう。諸作品は、従来指摘されるよりは遙に国家批判に及んでいる。この点は、メルヴィルにおけるイデオロギー批評の盛んな昨今であってみれば、もっと評価されてしかるべきであろう。¹⁾ 本稿で検討するのは、詩集『ジョン・マーと他の水夫たち』の巻頭を飾る短編「ジョン・マー」("John Marr") である。この作品も、批評では等閑視されてきた。しかし

* 福岡大学人文学部教授

「ジョン・マー」からは、声高ではなくとも、存外、射程距離のあるメルヴィルの国家観が炙り出せる。本稿では「ジョン・マー」におけるイデオロギーを、作品に秘められた先住民的要素の検討をとおして探ってゆく。

1. 晩年の情況

まず、『ジョン・マーと他の水夫たち』の主たる執筆時期におけるメルヴィルの様子を想像したい。これはメルヴィルが長い失意の歳月を経た後に、²⁾ ようやく得ることができた平安の数年間であった。彼は 1866 年から検査官としてニューヨーク市の税関で働いていた。僅か 4 ドルの日給を得るために、リューマチ持ちの身でありながら、一日中マンハッタンの港を歩き詰めで船荷を調べる仕事で、昇進・昇給とは無縁であった。かろうじて海と繋がりがある職種とはいえ、1880 年、愛娘ファニー (Fanny) の結婚の日にすら、休みをとることで解雇されることを恐れて仕事に行ったことに端的に伺えるような、みじめな勤労ぶりであった。職場では賄賂が横行していたというが、メルヴィルがそうしたことに手を染めた形跡はない。

メルヴィルの付き合いの範囲は、親族や友人の間でも、芸術関係者とも急速に狭まっていった。1878 年には、作家活動を始めたときからの畏友エバート・ダイキンク (Evert Duyckinck) が死に、文壇との交流を失う。かつての編集者ダイキンクは、メルヴィルにとって保守的権威の体現者といった感じで疎ましく感じられたこともあったはずだが、その後、蔵書を貸してもらったりもしつつ、共に老い、国の急速な近代化について愚痴をこぼしあえる仲になっていた。また、1883 年にはナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) の息子ジュリアン (Julian) が、両親の伝記執筆のための取材をしにメルヴィル宅に押しかけ、挙句、不機嫌に応接をしたメルヴィルの様子を皮肉な筆致で活字にした。

とりわけ 1884 年には、周りの者たちの死が相次いだ。わけても、同年に弟

トマス・メルヴィル・ジュニア（Thomas Melvill, Jr.）が55歳で急死した時には、ハーマン・メルヴィルはショックから寝込み、近所で執り行われた葬式にも埋葬にも参列できずじまいであった。トマスは、押し出しの良い、ハーマンとは違うタイプではあったが、海の男という共通項もあり相性が良かったようで、ハーマンは1860年には、トマスの船に乗り、ホーン岬経由で共にカリフォルニアに旅をしたこともあった。トマスの死によって、ハーマンは1867年から17年間トマスが治めていたニューヨーク市のスナッグ・ハーバー（Sailors' Snug Harbor）との繋がりも失うことになった。³⁾ この弟は一族の中心的存在でもあり、ハーマンは、スナッグ・ハーバーでの催しに親族ぐるみで頻繁に出入りをしてきた。週末には一人でもよく訪れ、同世代の元水夫たちと、冒険譚やとりとめもないお喋りに興じ、タバコを喫み、船歌を歌うなどした。船乗りを謳った作品を多く所収した『ジョン・マーと他の水夫たち』全体を論じるにあたっては、とくに、このハーバーにおける気さくで豪快な交流の喪失は無視できない。この後、メルヴィルは海への郷愁のはけ口を創作に見出し、ハーバーで老船乗りたちと歌う代わりに、自作の詩で謳うことにしたのであろう。

失意の歲月、メルヴィルは誰に読んでもらう見込みもなく、ろくに家族の理解も得られず、黙々と執筆を続けていた。しかしながら、そうするうちに、思いがけず鬱積した日々を打ち破ってくれる金銭・精神両面における変化が、主として二箇所からもたらされる。作家人生のほとんどを金欠状態で過ごしていたメルヴィルであったが、1885年に妻の母から約4,000ドルなどの遺産が、同年、こちらは小額ながらもメルヴィルにも叔母から100ドルの遺産が転がり込む。かくして、彼は翌年末に、19年間勤めた税関の職を辞し、ようやく悠々自適の老後を始めることができた。66歳であった。

ほぼ時を同じくして、メルヴィルのもとに、面識もなかったイギリスやカナダの若き文学者からファンレターが舞い込む。ジェームズ・ビルスン（James

Billson) やウィリアム・クラーク・ラッセル (William Clark Russell) たちであった。メルヴィル作品、とくに『白鯨』と『ピエール』が、イギリスではラディカルな嗜好の持ち主や、同性愛の若者の間で一種、カルト的に読まれていたらしい。⁴⁾ こうした崇拜が、晩年のメルヴィルが作家としての矜持を保つことができた一因とみなしてよい。また、皮肉にも、先述のジュリアン・ホーソンが出した伝記『ナサニエル・ホーソンと妻』(*Nathaniel Hawthorne and His Wife*, 1884) で、40年以上前に親密だったときにメルヴィルがナサニエル・ホーソン宛てに若々しい熱い想いを吐露した書簡を、ジュリアンが活字にした。当時、敬愛していたホーソンに捨てられたかたちとなったメルヴィルにしてみれば、憤懣のものであったはずだ。しかし奇妙なことに、これが、当時のイギリスでのメルヴィル再評価と相俟って、長年忘却していたメルヴィルという作家のことを文学界が思い出す、よすがとなった。

いずれもささやかながら、以上のような物心両面に訪れた余裕が、最晩年のメルヴィルの詩作ならびに遺作「ビリー・バッド」創作を支えたのであろう。彼は表現者として挫けず、運もメルヴィルを見捨てなかった。

2. 先住民的人物ジョン・マー

作品「ジョン・マー」に籠められた先住民の主題は、メルヴィル批評では無視されてきた。⁵⁾ アメリカン・ルネッサンス期を代表する作家の先住民表象を扱ったルーシー・マドックス (Lucy Maddox) ですら、「ジョン・マー」には触れていない。本作は、論じられる場合でも、伝記的解釈が主であった。つまり、人生の敗残者の繰言を描いたものであるとか、過ぎ去りし日々への感溺を描いた回顧的な作品として片付けられた。あるいは、メルヴィルの伯父トマス・メルヴィル (Thomas Melville) が主人公であるといったような、モデル探しであった。

また、「ジョン・マー」批評にはメルヴィル本人を同詩集所収の詩作品「花

婿ディック」("Bridegroom Dick") の謳い手ディックと重ねる向きもある。かつて「花婿ディック」と綽名された老主人公は、酒を飲みながら、妻に水夫時代の思い出を長々と独白で謳う。だが筆者は、作家メルヴィルはむしろ「ジョン・マー」にこそ色濃く投影されていると考える。家庭人としてのメルヴィルというのであれば、たしかにディックに近かったであろう。かつては確執もあったようだが、妻と共に老いてまた楽し、といった穏やかな心境に達していたようである。とはいえ、こと作家としてのメルヴィルとなると、「ジョン・マー」の語り手にはるかに近かったと考えられる。「ジョン・マー」は到底、伝記資料や、詩としてのみ扱ってよしとはできない苛烈さを秘めている。むしろジョン・マーと船乗りたちの、かつての合言葉「人生は嵐さ—だから荒れようぜ！」(Life is storm—let storm! 267) の心意気こそが、本短編が詩集巻頭を飾るにふさわしい由縁であると考えられる。

「ジョン・マー」の主人公は、海を愛するジョン・マーである。彼は海賊に負傷させられたために、海を離れることを余儀なくされた。とはいえ、本人にとってみれば場を移して放浪を続けただけのことで、アイデンティティは保っているらしい。人生の浮沈を耐え抜き、作品の時点での舞台となっている、まだ辺境であった中西部に辿りついている。その地で結婚して、東の間の幸せを得るも、ほんの数年で妻と一人っ子に死なれる。ジョン・マーは生涯唯一の深い絆であった家族を自ら埋葬すると、妻子が眠る地を離れまいと定住を決意する。

長年船に乗っていたので、ジョン・マーは大草原に海原を重ね見る。彼にとっては海洋体験がアイデンティティの根幹をなすので、開拓農民の集まりのなかでは、せめて陽気であった玉葱の皮剥きに出かけても、海での体験について隣人たちに語る。(この集まりが日曜に開かれるということは、敬虔とはいえ開拓民は安息日にも働いているわけである。) だが、ある日、海の話には当地人

は興味が無いのだと、共同体の主のような人物に告げられる。かくして、ジョン・マーは、いわば声を奪われた状態となり、心はおのずと過去に向かっていく。周りの開拓農民は、ジョン・マーが生きてきた海の世界に興味を示さず、日々の生活に明け暮れている。

短期間に、大平原のどこにもかしこにも町が生まれ、富裕農家の塙が巡らされている。次々と辺境は準州となってゆき、人口を増やして州に昇格していった。ジョン・マーは、あくまでも部外者としての視点で、中西部開拓史を観察している。

ジョン・マーは人生に倦み、回顧的になり、音信も途絶えた海の仲間のことばかりを想うようになる。遂には、かつての仲間は妻子に次ぐ魂の友と感じられ、仲間の幻影は、初めのうちこそ朧としていたが、形をとって現われるようになる。ジョン・マーはまだ中年であるが、老境に達しているかのようでもある。主人公は全体の三分の一弱を占める韻文セクションで、仲間に頓呼法で謳いかけ、そのまま作品は閉じられる。しかし閉じられるときの声は清明である。

ジョン・マー本人は白人である（眉毛は黒いとあるが）。とはいえ、ジョン・マーは価値観、及びそれに基づく言動において、先住民的に造形されている。本稿では、主人公の先住民的な要素として3点を挙げてゆく。

第1に、ジョン・マーはあまりに価値観が違う主流社会に同化を強いられる状況である。単調な苦難を生き抜いてきたから開拓民は実直さ一辺倒で芸術的でもなかったし、生活以外のことに心揺さぶられたいなどは願ってもいなかった。快適に暮らしたければ、周りの価値観に合わせなくてはならない点で、ジョン・マーは同化を迫られて応じない先住民めく。開拓民たちは農業のみを重視して露とも疑わない。（ここで、早くは第三代大統領トマス・ジェファソンも、先住民に農民となることを主張したことを想起してもよい。）対してジョン・マーは、世界の海を経巡る過程で培ったコスモポリタンの考えゆえに、開拓

民との価値観のずれが甚だしい。

第2点としては、親族もおらず、妻子に死なれた天涯孤独な残存者ジョン・マーは、部族最後の生き残りめく。夢幻としての亡霊のみが心の友であるという作品終盤の運びも、彼の先住民色を濃くする。妻子の埋葬地から離れるつもりがないという決意にしても、思い出の詰まったトポスから人を強制移住（removal）させることの過酷さを想起させ、1830年代に施行された先住民強制移住と重なる。ひいては、部族が死者を悼むために故郷に戻り、結果として虐殺された先住民、例えば後述するブラックホークたちを想起させる。ジョン・マーは、謳うこと、幻視することで、旧き良き時代を再現しようと努める。

最後に第3点としては、ジョン・マーの夢幻に姿を呼び出す魂の片割れたちは、妙に先住民的である。終結部の詩では、3人称の語り手から引き取るようにして、何の前触れも断りもなくジョン・マーが謳い出す。とりわけこのセクションのジョン・マーは、場違い観に苛まれ続け、やるかたのない憤懣を抱いていたであろう、税関で働いたメルヴィルその人の魂の叫びといった感を呈する。また、想像によってしか存在させえぬ対象という意味では、滅んだ先住民部族と主人公の船乗り仲間を重ねることもできよう。大平原が大海原と重なり、先住民と船乗りが重なるならば、時流に乗らないジョン・マー自身、同化を拒むことで滅びの道を歩まされた先住民と重なる。しかし、いずれも、そうそう容易には滅ぼされそうな気配はない。

ジョン・マーが、自分の周りを漂う、姿も顔も見えると言う亡霊たちは、非白人であるか、たとえ白人であったとしても文化的に越境している者たちである。詩行はこうだ。"Ye float around me, form and feature:--/ Tattoosings, ear-rings, love-locks curled;/ Barbarians of man's simpler nature" (268) このように恋しい船乗り仲間の具体的な外見は、刺青を施し、耳飾りをしている蛮人たちである。刺青というと、メルヴィルの第一作『タイピー』(Typee, 1846)で描かれたポリネシアのタイピー族のような南海の現地人（および一部

の北米先住民)を、耳飾りという『白鯨』(*Moby-Dick*, 1851)のアフリカ人銛士ダグー(Dagoo)のようなアフリカ系を、そしてラブロックといわれる耳の下で結んで下げた髪は、ウェーブしている点を除けば、北米先住民を思わせる。

以上、主人公ジョン・マーは先住民的に造型されていることを、作品の荒筋を交えつつ検討した。ジョン・マーの価値観は、決して中立的な声とはいえぬ3人称の語りと相乗作用がある。ジョン・マーと先住民との重なりは、作品の特異な語りを考慮すれば逆照射されてくる類のものであるので、われわれは次に「ジョン・マー」の語りの視座がどういったところにあるのか、検討してゆく。

3. 語りの先住民的側面

作品全体の3分の2強を占める散文セクションは、3人称で語られる。3人称とはいえ、この語りは、主人公ジョン・マーに同情、もしくは共感を寄せ、合衆国に対して手厳しい物言いを連発する。本セクションの最たる特徴は、白人が先住民に抱いていた通念を語りがしたたかに転覆してみせることである。

ただ、この語り手は大人である。ジョン・マーの孤立無援は誰が悪いというわけではなく、彼と周りの人間とは生きてきた道が違うがゆえに、当然の帰結として価値観が違うのだと解説する。こうした諦観は、翻ってみれば、税関勤めのメルヴィルが同僚に対して抱いていた気分でもあったろう。しかし、作品の底層にはおよそ諦観とは無縁の苛烈さがある。

まず、再び風景のなかの先住民の痕跡に注目したい。ミシシッピ河流域および南東部諸州にインディアンの塚と呼ばれる盛り土を築いた先史時代に、高度文明を持っていたといわれるマウンド・ビルダーと称される先住民諸部族がいたことは知られていた。ジョン・マーは妻子を埋葬して土を盛ったが、傍にあるこの盛り土と並列するように語られる。

In one coffin, put together by his own hands, they are committed with meager rites to the earth — another mound, though a small one, in the wide prairie, not far from where the mound-builders of a race only conjecturable had left their pottery and bones, one common clay, under a strange terrace serpentine in form. (263)

このような、蛇形をした広い段々の盛り土への言及は考古学的考証に叶っており、メルヴィルの先住民に関する知識と関心のほども窺わせる。

作品からの下の引用のように、共同体で拒まれたジョン・マーは、そう遠くない昔に当地にいた先住民に漠然と想いを馳せる。ここで重要なのは、彼が開拓民は人間に対して冷酷かつ無関心であると感じ、むしろ姿を見たこともない先住の民に近しさを感じることである。

Such unresponsiveness in one's fellow-creatures set apart from factitious life, and by their vocation...standing, as it were, next of kin to Nature; this, to John Marr, seemed of a piece with the apathy of Nature herself as envisaged to him here on a prairie where none but the perished mound-builders had as yet left a durable mark. (265)

最後の箇所は、謎に包まれてはいるが高度文明を持っていたとおぼしい盛り土の作り手たちを、開拓民に優るととらえている。語り手は、過去回帰的な主人公を批判するどころか、自身も、人は過去から逃れられないと考えており、"[O]ne cannot always be talking about the present, much less speculating about the future; one must needs recur to the past" (264) というような過去重視の描写も目に付く。しかも開拓民と対照させるのは、引用部に明らかな

ように先住民マウンド・ビルダーである。

「ジョン・マー」の語りは下のように、額に汗するだけの開拓民には悦びから生まれるぬくもり、つまり「生の華」("the flower of life")がないと断じる。そしてアメリカ人の特徴を語るにあたって引き合いに出す対象はといえば、(例えばワシントン・アーヴィング、ナサニエル・ホーソーン、ヘンリー・ジェイムズなどによって) 19世紀に頻繁になされたようには、ヨーロッパではなく、北米先住民である。19世紀半ばの白人はマニフェスト・デスティニーという錦の御旗を掲げて、文明(白人)が野蛮(野蛮人)を駆逐することは天命だとみなしてきた。が、本作品は、むしろ文化がないのは、生を楽しむ余裕すらなく単調な労働に明け暮れるばかりか、そうした窮状に気づきもしない白人側であると揶揄する。

...something was lacking. That something was geniality, *the flower of life* springing from some sense of joy in it, more or less. This their lot could not give to these hard-working endurers of the dispiriting malaria,— men to whom a holiday never came,— and they had too much of uprightness and no art at all or desire to affect what they did not really feel. (強調筆者 264)

語り手はしかも、開拓民の心の及ぶ範囲は実に狭く、思いやりの対象も限られていたと断じ、彼らの狭量さを指摘している。——"So limited unavoidably was the mental reach, and by consequence the range of sympathy, in this particular hand of domestic emigrants..." (264) こうした口調には、先住民を惜しむ気持ちが感知できよう。

さて、メルヴィルは「ジョン・マー」における現時点を1838年頃に特定した。よって、作中に具体名こそ出されていなくとも、下の引用部で言及されて

いる戦争はブラックホーク戦争（Black Hawk War, 1832年）である。当時期にミシシッピ河近くで起こった対先住民戦争というと、族長ブラックホーク率いるフォックス族（the Fox）とサック族（the Sac）の血が連邦軍によって流され、ミシシッピ河を染めた本戦争を措いて他にない。

The remnant of Indian thereabout — all but exterminated in their recent and final war with regular white troops, a war waged by the Red Men for their native soil and natural rights — had been coerced into the occupancy of wilds not very far beyond the Mississippi — wilds *then*, but now the seats of municipalities and States. (265)

上記の「一帯の先住民の生き残りは、白人の正規軍との間に最近起こった、故郷奪回と自然権（natural rights）を求めて戦った戦争ではほぼ絶滅し、赤い人はミシシッピ河からさほど遠くない荒野に追われていた」というくだりは、先住民強制移住にあったものの、ミシシッピ河を渡って故郷に戻ったがために虐殺されたブラックホークが率いた部族にたいする、語り手の理解を示す。先住民が故郷を失いたくないというのは彼らの「当たり前の権利」（natural rights）であるという言説などは、世間の先住民観にたいする挑戦ととるべきであろう。先住民が当然抱くであろう「想い」なのではない。「権利」であると書かれている。

この natural rights は、表意では、このように先住民の「当たり前の権利」であろうが、「自然権」とも読める。「自然権」ととると一層、苛烈な白人批判となる。合衆国で早くから、「自然権」は先住民からの土地収奪を正当化するのに使われていたからである。従来、白人は、先住民は野蛮で、その日暮らしで何も残さないのだから、怠惰な先住民から土地を奪って構わないという論理

で、土地収奪を正当化してきた。大衆小説でもそう描かれてきた。⁶⁾

インディアンが持っていた自然の権利は、皮肉なことに、啓蒙主義の影響がでてくるアメリカ革命の頃から消えてしまう。土地を耕した者のみが土地への「自然権」を持つと考えられるようになり、放牧するインディアンは体系的に土壌を耕して改良する努力を怠っているのだから所有権は主張できない、という白人の論理が前面に出てくる。

(小倉61)

特に東部では狩猟部族でも、実際にはとうもろこしなどを作っていた集団も多かったが、そうしたことは無視された。一般白人には先住民は「滅び行く人種」とみなされ、彼らの滅びの完了は時間の問題だと思われていた。(ちなみに、メルヴィルの「ジョン・マー」執筆時は、フロンティア消滅宣言のほぼ5～6年前と思われる。) natural rights を「当たり前の権利」ととろうと、「自然権」ととろうと、このように「ジョン・マー」の語りが先住民の natural rights を認めることは、19世紀という時代を考えれば画期的であった。

メルヴィルはブラックホーク戦争についてかなり知っていたと考えてよい。この戦争は、1876年に戦われた大平原の覇者スー族との戦いであるリトル・ビッグ・ホーンの戦いほど有名ではないが、中西部での対先住民戦争といえば、ブラックホーク戦争(虐殺ともとれるが、本稿では問わない)も代表的である。投降した有名な族長の例にもれず、ブラックホークも息子と共に、メルヴィルが当時住んでいたニューヨーク市を含む東部の大都市をパレードさせられ、新聞でも大きく取り上げられた。メルヴィルが読んだ証拠はないが、ブラックホークは1833年に口述で「自伝」も出版している(Black Hawk)。

しかも伝記的事実を確認すれば、メルヴィルは、まだ作家になるどころか水夫にもなっていなかった若き1837年に、サク族が暮らしていた土地を、友

人との旅で訪れている。その折にセントルイスの東で、先住民の残した巨大マウンドを訪れてもいる。カホキア（Cahokia）であろうと推測しうる（Salisbury）。イリノイ州ガリーナ（Galena）に住んでいた伯父トマス・メルヴィル（Thomas Melville）を訪れた旅行中のことである。伯父トマスはフランス生活も長かったし、フランス人伴侶を持ち、零落して後、辺境に近い地に引越してから大層なフランス趣味の暮らしをしていたという。場違いな男として荒々しい辺境に暮すこのトマスがジョン・マーのモデルだといわれることもある由縁である。

語り手の価値観は、およそ西漸運動を寿ぐ一般アメリカ人の価値観とはほど遠い。"a life which in America can today any western bound but the ocean that washes Asia" (266) と、合衆国にとって西の国境はアジアの岸しかないのだというが、出てくる文脈を考えれば、皮肉以外の何ものでもない。語り手は「文明」の拡張によって荒野が失われたことを、あからさまに悼む。語り手の時点では、最近まで先住民が住んでいたというイリノイが、早くも穀倉地帯に変貌を遂げている。こうした短期間の変貌は、作品をとおして執拗といってもよいほど繰り返される。すでに作品第三文節では、移住者が狂おしく熱に浮かされたようにして押し寄せる様子を "a fever, bane of new settlers" (263) と表されていたが、bane なる語には、「害毒、破滅（のもと）、死、悲嘆、苦悩、死をもたらすもの、悩み（の種）」といった否定的な意味しかない。

何に対して破滅なり死をもたらすのかといえば、下のように、大移動をして平原から姿を消した野牛と先住民に、である。白人狩人が鳥の激減の先駆けなのだとも述べている箇所では、語り手は、先住民と野牛のいたときの、豊穡であった大自然を懐かしむ。

Prior to that, the bison, once streaming countless in these vast aboriginal pastures, had retreated, dwindled in number, before the

hunters, in main a race distinct from the agricultural pioneers, though generally their advance-guard. Such double exodus of man and beast left the plain a desert, green or blossoming indeed, but almost as forsaken as the Siberian Obi. (265)

開墾によって穀物畑は広がるが、生態系を壊すことで手付かずの自然は失われ、動物（当時の白人の価値観では先住民も含める）のいく種類かは絶滅ないしはその直前にまで追い詰められた。⁷⁾

また、気宇広大な景を愛でる一方で、上記引用部では先住民と野牛が駆逐された大平原が砂漠のように、また凍てつく（「ぞっとするような」とも訳せる）シベリアのオビのように寂寥としているという。緑ゆたかな田園地帯を、凍てつく砂漠であるとか、下記引用部のように「干上がった海」と表すということは、空白の領域に文明が進出することで土地が初めて活きたと考えた当時の白人通念、つまり先述の自然権という概念の転覆である。一面の畑と化した景をオビ砂漠に喩えるとは、21世紀現在隆盛中の環境批評やネイチャー・ライティングにおいてならいざしらず、およそ19世紀の通念ではありえなかった。本稿で論じる余裕はないが、ここにはたとえば19世紀アメリカの美学界を席卷したハドソンリバー派が提唱したアメリカン・ピクチャレスクという美学概念はおよそ無縁である。⁸⁾

Blank stillness would for hours reign unbroken on this prairie. "It is the bed of a dried — up sea," said the companionless sailor [i.e., John Marr] — no geologist — to himself, musing at twilight upon the fixed undulations of that immense alluvial expanse bounded only by the horizon, and missing there the stir that, to alert eyes and ears, animates at all times the apparent solitudes of the deep. (265)

作品には開拓民が経度と緯度のはっきりした場所に開拓民がいる様子、技術を使って荒野に入り込んだことも描かれている。むろん、地図製作や、フロンティアライン、州境、個々人の不動産を囲むフェンスによる境界線確定が、今では風景のあらゆるところを有刺鉄線や鉄道で仕切っている（"everywhere intersected with wire and rail" (266)）というのは、様々な線引きを強調する。「地球」ということまで考えると、大航海時代にアメリカが「発見」され、所有されるようになったという含蓄すら帯びる。上記に長く引用した文章のダッシュ部分では、唐突にジョン・マーが「地理学者ではない」と語り手が述べることも意味深い。こうした境界線確定とその遵守は、先住民の大まかな土地概念——中西部の州境が直線であることが多いのとは対照的な（たとえば川で区切る）部族の土地概念——とも異なっていよう。

ジョン・マーがあちこちを後にして（after a variety of removals, 263）当地に流れ着いたという、作品第二文節における removal に注目してみる。この語は先住民の強制移住を思わずにはすまない。アンドリュー・ジャクソンが大統領時代に先住民強制移住法（the Indian Removal Act）を1830年に議会で通過させ、ミシシッピー以東にいた全部族を対象に、ミシシッピー河以西への強制移住を施行した。具体的にはオクラホマのインディアン・テリトリーに諸部族を押し込んだ。周知のように、移住を拒む先住民には、文字を持ち、キリスト教への改宗者を多く出すなどして「文明化」された諸部族も含まれ、彼らを連邦軍が武力で移住させたことは、多数の死者を出したチェロキー族の「涙の旅路」でよく知られている。

このように、仔細に見れば、語り手は一貫性のある独特のイデオロギーを隠し持ち、周到に筆を進めていることが分かる。むろん、メルヴィルの大多数の作品の例に漏れず、本作においても晦渋はあり、ひとつひとつの主張をつまびらかにする親切的な語りであるとはいえない。すでに長く引用した数箇所から明らかなように、複数の主張を一気に詰め込むことで、先住民に関する語り手の

イデオロギーはむしろ意図的に見えにくくされている。

後書

本稿では「ジョン・マー」をメルヴィルの国家観を伺う格好の作品のひとつと捉え、作品解釈にあたって従来見過ごされてきたイデオロギーを検証した。「ジョン・マー」は、額に汗するだけの開拓民には生の華がないと断じ、兩人種の優劣をいうのに通常使われる文明に対する野蛮という二項対立を逆転させる。

メルヴィルは第一作『タイピー』を出すにあたり、出版社から作品のキリスト教批判と西洋文明批判に対して激しい検閲を受けた。このことは象徴的で、以来、彼は常に市場を意識して書かざるをえなかった。最晩年の私家版詩集は、比較的に書きたいものが書ける気楽さもあずかって、青年期や壮年期の傑作群とは一味違う魅力を湛えていることが多い。「ジョン・マー」は小粒な作品ながらも、その内容はひいては傑作と評される遺作「ビリー・バッド」解釈にあたっては無視できないと考えられてならない。筆者には、この時期のメルヴィルが運命を甘受するという老境に達していたとは思えない。詩集『ジョン・マーと他の水夫たち』を出した僅か2ヵ月後、1888年11月にメルヴィルは「ビリー・バッド」に着手することからも、人生最後の創作の爆発期における高揚した気分を感じ取ることができよう。わけても、「ジョン・マー」の詩セクションで歓呼された原初の無垢をもっていた平水夫仲間の理想化といえば、「ビリー・バッド」の主人公、つまり人類の「樂園喪失」以前の無垢を一身に体現する主人公ビリー・バッドの原型であろう。

同時期に書かれた他作品にも北米先住民ならびに南海における先住の民への独特のイデオロギーと宗教観が散見される。それについての検討はこれからの課題としたい。

* 本論文は平成 18 年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)（課題番号 15520209）の研究成果の一部である。

注

1. 先駆的なイデオロギー研究の単行本としては牧野有通を参照。また、メルヴィルと詩については、最近大きく採り上げられるようになっていいる。舌津智之が動向を上手くまとめている。(舌津 133-135) また、「ピリー・パッド」も、水夫の歌から発展させた経緯に鑑みれば、「ジョン・マー」のように散文と韻文との混交とみることもできる。(舌津 133)
2. メルヴィルは二人の息子に悲惨な死なれ方をしている。1867 年には、同居をしていた、当時 18 歳の長男マルカム (Malcom) が頭をピストルで撃ち抜いて死んでいた。前夜にメルヴィルが真夜中に帰宅した息子をきつく叱っていたこともあり、悲痛極まる事件だったはずである。次男スタンウィックス (Stanwix) は世界中を放浪し始め、実質的にも比喩的にも行方不明状態が続いた挙句、1886 年にゴールドラッシュで訪れていたサンフランシスコにて、35 歳で病死した。
3. スナッグ・ハーバーは、有徳の金持の遺言によって 1833 年に作られた。遺産の一部を、元船乗りのために使って欲しいということで、陸に上がって窮乏生活をしている年配の元船乗りのために、永久の住処を提供した。しかも、あらゆる国籍・宗教の者に開かれていた。(結局、遺言に記されていたようにはニューヨークのマンハッタン島ではなく、近くのスタテン島に変更して実現。) snug という単語には「心地よい、きちんとした」といった肯定的な意味があるが、このハーバーはその名に違わず、かつての船乗りに稀有な場所を提供し、作家メルヴィルにとっても、聖域といっても過言でない場所であった。トマス・メルヴィル・ジュニアは、強引な仕事ぶりであったと伝えられている。住民の元船乗りに禁酒を課すなど規律に厳しかった一方で、自分はパーティーなど派手な暮らしをしたことで批判されてもいた。しかし、凄腕の彼の統治時代にハーバーは一気に拡張し、800 人が暮らしていた時期もあったという。メルヴィルの住所はニューヨーク市マンハッタン島であったので、ハーバーのあったスタテン島までは便利であった。スナッグ・ハーバーについては Gerald J. Barry 参照。
4. わけても、『グロスヴェナー号の難破』(*The Wreck of the Grosvenor*, 1877) を著したラッセルは、1884 年 9 月の *Contemporary Review* (London) の海洋文学を扱う

書評欄で、世間に忘れられていたメルヴィルを激賞した。(この書評はインターネットで読むことができる)。ラッセルは、『白鯨』はただの娯楽としての海洋物語にとどまるものではなく、狂わしいほどにこの世離れする箇所もあるのでコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) の「老水夫行」("Ancient Mariner") に比すると激賞した。また、『白鯨』がシェイクスピア的であり、ウィリアム・ブレイク (William Blake) の絵を想起させると述べた。メルヴィルと文通もしたらしい。こうした経緯から、メルヴィルの詩集『ジョン・マーと他の水夫たち』は、ラッセルの名をエピグラムに掲げ、明るい口調の序文付きでラッセルに捧げられた。星野勝利も述べるように、メルヴィルからラッセルという「まだ若いこの海洋作家に送る言葉に認められるものは、同じく海を描いてきた先輩作家としての、穏やかな、満ち足りた精神というべきものである。」(星野 266-67)

5. たとえば、メルヴィルの詩の研究者として有名なウィリアム・H・シャー (William H. Shurr) ですら「ジョン・マー」を論じていない。こうした等閑視の一因としては、本作品が散文と韻文の混交ジャンルであることがあるかもしれない。「ジョン・マー」はペンギン版でこそ中短篇集に収められているが、普通、ダグラス・ロビラード編のように詩集に所収されている。わが国でも事情は同じである。杉浦銀策のメルヴィルの短編の訳本にも入っていない。副題で「メルヴィルの全短編を読む」と名うった野間正二の『読みの快樂』でも扱われていない。
6. 当時の文学作品でも、この立場からものを書いている場合が多い。キャサリン・マリア・セジウィック (Catharine Maria Sedgwick) 著のベストセラー小説『ホープ・レズリー』(*Hope Leslie* 1827) の序文から、三人称の語り手が先住民「滅び行く人種」に同情を禁じる理由として、存在したことを証明するもの(記念碑)を何も残せない先住民は、表の「歴史」から消えていってしかるべきであると述べている。引用する。
"Imagination may be indulged in lingering for a moment in those dusky regions of the past; but it is not permitted to reasonable instructed man, to admire or regret tribes of human beings, who lived and died, leaving scarcely a more enduring memorial, than the forsaken nest that vanishes before one winter's storms." (86)
7. これは、本作品では扱っていないが、ビーバーなどが白人との交易のために絶滅近くに追い込まれたこと(木村 下山 225-371)、また、狼が悪魔的であるとされて北米で徹底して駆られた (Lopez, 137-279) ことと同様に、白人が入り込むことにより

野生動物が消えることを指す。

8. 晩年の同時期のメルヴィルのアメリカン・ピクチャレスク観については、「ジョン・マー」同様、散文と韻文の混交ジャンルの作品「リップ・ヴァン・ウィンクルのライラック」を論じた大島を参照。（「リップ・ヴァン・ウィンクルのライラック」は、一旦は1890年、つまりメルヴィルの死の一年半ほど前に『雑草と野生植物』に集められ、死後出版となった。）「リップ・ヴァン・ウィンクルのライラック」は、東海岸の独立戦争前後を舞台とした作品ながら、白人による移住後を扱い、開拓民に対して否定的視座に徹した点で、「ジョン・マー」と共通する。いずれも、生活においてゆとりを重んじる主人公を、実利一辺倒で押し付けがましい、進歩やら拡張に血眼になっていたアメリカという国家と対比させる点で、同根である。

文献

- 大島由起子「メルヴィルの反アメリカン・ピクチャレスク—「リップ・ヴァン・ウィンクルのライラック」論」早瀬博範（編）『アメリカ文学と絵画—文学におけるピクトリアリズム』溪水社、2000年
- 小倉いずみ『ジョン・コットンとピューリタニズム』溪流社、2004年
- 木村和男『毛皮交易が創る世界』岩波書店、2004年
- 下山晃『毛皮と皮革の文明史—世界フロンティアと掠奪のシステム』ミネルヴァ書房、2005年
- 野間正二『読みの快樂—メルヴィルの全短編を読む』国書刊行会、1999年
- 星野勝利『ハーマン・メルヴィル—奈落と星と』リーベル出版、1991年
- 牧野有通『世界を覆う白い幻影—メルヴィルとアメリカ・アイディオロジー』南雲堂、1996年
- 舌津智之「マシーセンの万華鏡—アメリカ文学史の見直し論争」平石貴樹（編）『アメリカ文学史・文化史の展望』松柏社、2005年
- ハーマン・メルヴィル『乙女たちの地獄』杉浦銀策（訳）全2巻、国書刊行会、1983年
- Barry, Gerald J. *The Sailor's Snug Harbor: A History*. (New York: Fordham University Press, 2000)
- Hawk, Black. Jackson, Donald (ed.) *Black Hawk: An Autobiography*. (Chicago: The

- University of Illinois Press, 1990)
- Lopez, Barry Holstun. *Of Wolves and Men*. (New York: A Touchstone Book, 1978)
- Maddox, Lucy. *Removals: Nineteenth-Century American Literature and the Politics of Indian Affairs*. (New York: Oxford University Press, 1991)
- Melville, Herman. Douglas Robillard (ed) *The Poems of Herman Melville*. (Kent, Ohio: The Kent State University Press, 2000)
- Salisbury, Neal. "The Indian's Old World: Native American and the Coming of Europeans," Peter C. and James H. Merrell (eds.) *American Encounters*. (New York: Routledge, 2000)
- Sedgwick, Catharine Maria. *Hope Leslie; Or, Early Times in the Massachusetts*. (New York: Penguin, 1998)
- Shurr, William H. *The Mystery of Iniquity: Melville as Poet, 1857–1891*. (Lexington: The University Press of Kentucky, 1972)